

槐 かい

岡井省二創刊

令和2年10月号

令和二年十月一日発行 第三十巻第十号 通巻第三五二号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



戦なき世

高橋将夫

下心あれば草笛鳴らぬなり
少年が少女を狙ふ草矢かな
鐘の音が鐘を離れぬ溽暑かな
夕立が消してゆきたる情火かな

瓢箪に触れ瓢箪に嫌はるる
大気圏抜けた気分で冷し酒

いかづちやゴシック文字がバラバラに
兜虫その武者ぶりにおちよぼ口
ささやかな野心を灯す百合の花
滴りに触れて化石に血がかよふ
戦なき世が箱庭の中にあり

槐安集

加藤みき

泳ぎても泳ぎても岸遠くあり
梅雨の間のたちまち高し龍笛よ
考も妣もみどりの森に住みあたり
にこにこと透徹したり天空へ
鳳蝶のすばやく杜に入りゆけり

中島陽華

弘法の海馬を思ふ目借時
皐月嶺とゴルフボールと陀羅尼助
夏潮の曾々木よ洞の弁天よ
たとふれば花南天ぞ南無三宝
指に塗るバージンオイル鳥雲に

近藤喜子

薰風^帽や御身こそ光のうつは
昨日はや遠しと拾ふ沙羅の花
我ここにあり告げてゐる蟬の声
夏惜しむ波の記憶を貝の殻
夜の秋や飛んでゆきたき空の果て

瀬川公馨

天辺は宴の最中合歡の花
泰山木の花の奥処に雨中泊
猫の目に守宮の腹の太かりき
夜目遠目繋ぎ止めたる紅蓮
ひるがほの八角形の面閉づ

竹内悦子

新生姜一筆箋に○と△と
珊瑚樹の花よ隣の婆は留守
而今てふ蕎麦屋の前の立葵
天変地異か一斉に止む蟬の声
朝顔に男三人の夕餉かな

雨村敏子

生き生きてはんざきの水親しかり
初蟬や硯の海に風生まる
青葉潮ジユゴンもタツノオトシゴも
紙箱に玉梓の束水鶏笛
風鈴や母あるごとく鳴りにける

柳川晋

江戸風のアイコン和蘭陀獅子頭
3 密の街を疾走する跣
香港シャツを見ず自由をさらに見ず
楽園^{タヒチ島}に水子の記憶ハツカ水
夏帽子いつも誰かと二人連れ

熊川暁子

青あらし島が流れて来るやうな
カサブランカに揺るる男の美学かな
喉仏見せて法螺^{ほら}貝吹く山開き
花かぼちや馬車になる夢持つてをり
黒南風や保水力なき山ばかり



江島照美

犬齒には太古の力夏薊
闇に咲く月下美人の青き白
待つ人を待つてをるなり水中花
黄金虫昼と夜とは別の顔
丸なすや触るれば破裂するやうな

岩下芳子

桑の実のジャムとろとると午後を煮る
飛魚の追はれて空へ逃げにけり
大輪を支へし蓮の茎確か
夕方の仙人掌の棘柔らかし
鉄橋も流れ来七月豪雨かな

寺田すず江

遥悼かより白い風呼ぶ百日紅
梅雨明けや夕陽溶け込む水の音
ふつきれぬ思ひありけり著莪の花
夕星の風を生みけり百日紅
置きざりの浮人形の悲哀かな

有松洋子

パスワードが思ひ出せない熱帯夜
児の夢はバレリーナとや合歓の花
降りそそぐ宇宙の音楽ムジカキャンプの夜
囃鮎青きバケツにしづかなり
浮くくらげ夜の車窓に映る顔

田中信行

別れてもチェリーの余韻星明かり
茶会へと急ぐ草履や青もみぢ
アマビエの風鈴吊るす町屋かな
夏帽子新宿を出るあずさアマビエ＝疫病退治の妖怪かな
ロシア語の辞書を枕に大昼寝

近藤紀子

植田映す街のあかりの静と動
新玉新じやがどさと置きゆく勝手口
黄蝶来て居場所さがしてをりにける
鳥の聲さぐる青葉の奥にかな
月山の水参らす梅雨晴間

岩月優美子

師を追悼うて夏蝶一頭行つたきり
遠雷に見えなきものの見えて来し
梅雨明けや心の扉開け放つ
駆足で進む世の中道をしへ
パリ祭や気取つて歩く白孔雀

竹中一花

山寺に千の風鈴千ち千ちの風
観音の天衣光るや梅雨上る
国宝の書に雲母虫浮かれ出る
銀の日は水草に蜻蛉と生る
すててこの坐る上座や砥部と焼湯吞

前田美穂子

万緑や五百羅漢の顔ゆるぶ
葉柳の裏表見せ竹生島
夕顔や五右衛門風呂にすつぽりと
灯台の白く浮き立つ土用波
飽食は女の敵よ端居せる

吉田順子

沙羅咲くや「光のうつは」持つて旅に
行く雲の奥も雲ゆくさるすべり
草笛の強き一音風薫る
水牛の角に家紋や夏座敷
光陰や一本残るゆすらうめ

中田禎子

七月の冷製スープ陶の椅子
大夕焼け一間に影とピエロかな
はるばると恵比須さま連れ青葉湖
冬瓜の翡翠六腑の清らかに
大鍋を捨てたる夜の冷奴

槐市集

阿部さちよ

人生を風に委ねる昼寝かな
真夜中は囁くやうに梅の雨
紫陽花の隙のなきごと式部かな
二波三波地球庄する未知の夏
汗匂ふ祖父の胸にも眠る姫

井上静子

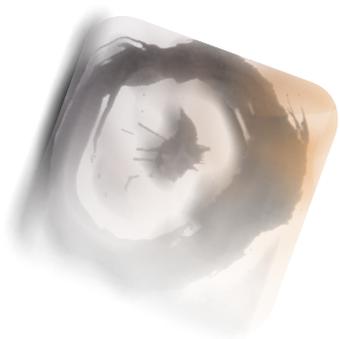
梅雨晴間よく笑ふ人来て笑ふ
海の日の風に色ある海の色
端切れ箱に花柄模様半夏雨
朝採れの胡瓜囃む音風の中
ジャムの蓋なかなか開かぬ蝉時雨

出利葉孝

梅雨空は雪舟蘆雪絡み合ひ
七夕や無病息災筆なじむ
天界のダムが溢れて梅雨豪雨
青芒槌音高き学徒兵
悪餓鬼や路地の三差路健次の忌

藤田美耶子

浜風やただ夕焼を待つ時間
ときどきは神の気まぐれ二重虹
当り前の日々帰らざる青葉光
放浪の思ひを誘ふポピーの野
輪唱の空へ空へと立葵



三浦純子

岡山にて日中韓の夏セミナー
涼しさや栗焼酎の香りある
天神祭空は彩り川染める
アカシヤの花の零れて褪せにけり
梅雨空や集中豪雨村襲ふ

三木 亨

鴉の糞白し夏のアスファルト
ヨツトゆく海の向かうに逗子葉山
花氷ゆめから覚めて母はぬず
幼子と異界に迷ふ夏の蝶
朝焼まつ赤なり法による無法

香港国家安全維持法

安野眞澄

大出水通ひし街のふるさとは
サングラス誰ぞ解らぬまま会釈
青春の笑顔はじける夏帽子
ふるさとの墓終ひして夾竹桃
惜別や訛しみじみ魂祭

柳橋繁子

涸れてをる化粧の井戸のやぶ蚊かな
鴨川に夜のとばりや鱧料理
山頂に石の祠や岩ひびり
睡蓮の水に流れのありにけり
巨勢道の先に広がる夏野かな

山田佳子

はつあきや雲ゆつくりと比良の山
一つ所に留まつてゐる金魚かな
青田風なつかしき香の立ちにけり
半夏生とりわけ白き花ありし
人恋し鹿茸のほの紅きかな

横山達江

実のつかぬ梅の青葉に雨静か
吾子乗せて竹の駿馬や夏座敷
未熟なる糠床手入れ母重ね
色も良し焼けばなお良し地産茄子
川床の瀬音涼しき貴船道

槐集

高橋将夫選

神の手が安息壞す梅雨入穴 大阪 平野 多聞

金剛の踏ん張る足に蜘蛛の糸
涅槃図の余白に螢隠れをる

蟻の道位置情報では鳥居下
蜻蛉には水蠶の時代の記憶なし

だうだうと空にある影洋玉蘭 岡崎 柴田 靖子

じつくりと男磨かん袋角
滝落つや考へることなく先へ
雲海や誰かゐて私も生きる
消える過去けせぬ過去あり夏の星

火曜日燃えるゴミ夏の恋出す 守口 三木 亨

坐禅堂僧の背後で無が昼寝
水道水吹上げられて見る世界
深海を遊ぶ金魚のふてぶてし
ちかごろは天の川にも外来種

滝しづきあびて己を取りもどす 大阪 藤田美耶子

大太鼓小太鼓自在はたた神
黄泉比良坂ほうたるに案内され

雨粒のシャンデリアめく蜘蛛の家
天地の気大向日葵に充電す

蒼天を突き上ぐ矜持夏木立 枚方 阪倉 孝子

戴きし命と茅の輪くぐりける
乗り越してひとり旅行く雲の峰
鉄線花こころに開き決断す
水打ちて天界の風待ちにける

無言館音なき風の青嵐 大阪 出利葉 孝

蛇の眼は少し潤んだピアスかな
少女から乙女になりぬ唐辛子
蝉しぐれ空気の海が波うてり
鷹の爪あし姨捨山の婆かな

銀河往来

高橋将夫

蟻の道位置情報では鳥居下 平野 多聞
GPSや携帯電話の基地局を使って対象物の位置を知る位置情報システム。そんな最新かつ日常的な素材と「蟻の道」を結び付けたところがユニーク。しかもその位置が「鳥居の下」とは神がかりのようであり、それでいてリアルでもある。

〈蜻蛉には水蛭の時代の記憶なし〉の水蛭(やこ)は蜻蛉の幼虫。蜻蛉の脳に水の中で過ごした幼虫時代の記憶は残っているのだろうか。私には羊水の中にいた時の記憶は無いのだが。

滝落つや考へることなく先へ 柴田 靖子
滝の水は落下したことをあれこれ考えずに、先へ先へと流れる。滝の水のこの捉え方に賛同。

〈じつくりと男磨かん袋角〉の句、鹿は春に角が生え変わる。角が落ちた袋角の鹿に往時の雄姿はないが、これからじつり男を磨くという。掲句と同様、将来を見据えている。

〈どうだろうと空にある影洋玉蘭〉雲海や誰かゐる私も生きる。〈消える過去消せぬ過去あり夏の星〉、どの句にも作者の心が通っている。

火曜日には燃えるゴミ夏の恋出す 三木 亨
ひと夏の淡い恋の思い出を燃えるゴミと詠む作者。ここまで言えば恋も吹っ切れるというも。

〈坐禅堂僧の背後で無が昼寝へちかごろは天の川にも外来種〉の句、どちらも切れ味が鋭い。

天地の気大向日葵に充電す 藤田美耶子
天地の気向日葵に充電するとはなんと気宇壮大。

戴きし命と茅の輪くぐりける 阪倉 孝子
生きている事への感謝の念がよく伝わってくる。

無言館 音なき風の青嵐 出利葉 孝
無言館の静寂の中で青嵐に大きく揺れる屋外の木々の姿を見ている景。無言館の中は静かな風なのかもしれない。

手の蛍光の重さを灯しをり 竹村 淳
手の平で点滅する螢の微妙な重さを光の重さとして作者は感じ取ったのであろう。

丸洗ひしたき人生白南風に 高野 昌代
白南風は梅雨明けの頃に南東方向から吹いてくる爽やかな季節風。人生を丸洗ひしたいという気分もうなずける。

〈海の日や砂にまぶされ貝になる〉は童心に帰る思いがする一句。

あぢさゐやてふてふ留まる車椅子 阿部さちよ
あぢさゐと蝶々と車椅子。なんとも癒される景。
〈天からのゆるりゆるりと代田水〉では、ゆるやかな柵田を水が下ってくる様子が目に浮かぶ。